

2 黒船祭にみる歴史的風致

(1) はじめに

下田は、海に開いた土地柄から、天正16年（1588）の後北条氏による水軍拠点としての下田城の築造、風待ち港で栄えた江戸時代、幕末開国の時代と、その歴史は「海」を外して語ることはできない。開国の歴史において下田開港の期間はわずか6年という短い期間であった。しかし、ペリー艦隊の来訪は、正に日本史上



第1回黒船祭(1934)

大きな出来事である黒船到来であり、その後の米国総領事ハリスの着任は、日本の開国の始まりであった。この開港の歴史と深く関わりがある了仙寺や玉泉寺といった史跡の数々は、下田市民にとっての誇りであり、黒船祭が始まったきっかけとなっている。黒船祭は、昭和9年（1934）に始まり、日米の文化や技能の披露や、地域レベルでの日米交流を成す祭事として下田市民全体に浸透し、多くの者が関わって運営され、継承されている。

(2) 下田における日米交流の歴史

ペリー艦隊と下田の人の交流は、下田が開港場となる嘉永7年（1854）頃から始まる。『図説下田市史（平成16年（2004））』によると、日米和親条約の交渉が進められるなかで、開港が下田・箱館開港に絞られてくると、アメリカ人が調査のため下田港を訪れるようになる。アメリカ人は、所々に立ち寄って下田の人からタバコやお茶を呼ばれたりした。そのお礼にボタンを置いていったが、下田の人は、それを珍しがり、高価な贈り物をもらったように喜んだという。

下田が開港場となると、応接所となった了仙寺には見物の男女がすきまなく集まり、この時のもてなしとして、保命酒、九年母（ミカン科の常緑低木で黄橙色の甘い実を結ぶ。江戸時代までは国内の主流品種だった。）、菓子が出された。

また、日米和親条約第5条では、アメリカ人の下田周辺の遊歩権が保障されていたため、アメリカ人が毎日のようにボートで柿崎へ上陸し、須崎・外浦・白浜・中村・本郷・立野・下田を見物して帰っていった。『ペリー艦隊日

本遠征記（安政3年（1856））』には、下田の人は、町を歩くアメリカ人に群がり、衣服を調べ、子供のような熱心さと喜びとをもってボタンや剣や華やかな衣服をつまみ、その名を尋ねるのが常だったという。さらに、下田の自然と人の織りなす景観を褒めたたえる記述も随所にあり、「下田の町の街路幅は約20フィート（約6メートル）で一部には碎石が敷かれており、一部分は舗装されている。下田は進化した開化の様相を呈していて、この町の建設者が清潔と健康に留意した点は、われわれが誇りとする合衆国の進歩した清潔と健康さよりはるかに進んでいる。」と記している。

（3）黒船祭を構成する建造物等

①了仙寺

ほうじゅんざん
法順山了仙寺は、宗派は日蓮宗で、嘉永12年（1635）の創建である。了仙寺は、国指定史跡であり、黒船祭で行われる「下田条約調印式再現」の舞台となる場所であり、文政元年（1818）再建の本堂、寛政11年（1799）建立の山門がある。（なお、建造物の詳細については、72ページに記載している。）



了仙寺

嘉永7年（1854）3月、日米和親条約が締結され、下田が日本最初の開港場となった。3月18日から21日にかけて、ペリー艦隊6隻が下田に入港した。24日、ペリーは了仙寺で、浦賀奉行支配組頭黒川嘉兵衛くろかわ かねへのもてなしを受けた。了仙寺境内は見物人で溢れたと言われている。

同年4月、ペリー艦隊は箱館港調査のため1隻だけ下田に残して出港し、5月には下田に帰港した。そして了仙寺において日米和親条約の細目を協定するため、13日、日本全権林復斎はやしふくさい（大学頭）等と会見した。このときペリー提督は、上陸に礼砲をとどろかせ、先頭に大砲を曳く300余人の水兵を軍楽隊の奏楽とともに了仙寺まで行進させて、下田の人たちを驚かせたという。22日、下田条約が妥結され、了仙寺と玉泉寺を米人休息所とする等、幾つかの条項が決定した。こうして欠乏品供給の名目により事実上の貿易が下田港において始まった。

②玉泉寺

ア 玉泉寺における日米交流の歴史

^{ずいりゅうざん}瑞龍山玉泉寺は、宗派は曹洞宗で、天正年中（1573～1591）の創建である。玉泉寺は、黒船祭の初日に米海軍主宰で「墓前祭」が行われる場所である。

嘉永7年（安政元年＝1854）3月、日米和親条約により下田が開港され、続いて5月、下田条約が結ばれると、玉泉寺は了仙寺とともに米人休息所に指定された。

安政3年（1856）7月になると、タウンゼント・ハリスが米国総領事として下田に来航した。しかし、幕府が着任を拒否しようとしたため数日間もめた。結局、条約の日本語訳に誤りがあったことがわかり、8月5日、日本最初の領事館が玉泉寺に開設され、本堂正面の庭には星条旗が掲揚された。



玉泉寺

安政5年（1858）6月19日、^{こしばおき}小柴沖停泊のポーハタン号艦上で、「日米通商修好条約」及び貿易章程が調印されると、ハリスは12月、公使に昇進した。その後、横浜が開港されると、安政6年（1859）5月に下田領事館は閉鎖され、ハリスはその使命を終え下田を去った。玉泉寺は、下田条約で埋葬所と位置付けられたため、アメリカ将兵の墓5基がある。

イ 玉泉寺 本堂

現在の本堂は、嘉永元年（1848）に建てられたもので、棟札によると昭和元年（1926）に本堂を大修繕した記録がある。銅板葺き、^{よせむねづくり}寄棟造屋根平入りで、^{こうはい}向拝がなく直線である。



玉泉寺 本堂

ウ 玉泉寺 アメリカ将兵の墓

玉泉寺本堂、向かって左側にアメリカ将兵の墓5基がある。日本開港のため来航したペリー艦隊の乗組員と、その後下田港に来航したアメリカ将兵のものである。

下田条約第5条「^{そりやく}柿崎玉泉寺境内に亜米利加人埋葬所を設け、^{そりやく}僥略ある事なし」という



玉泉寺 アメリカ将兵の墓

規定により埋葬されたもので、墓石には英文が刻まれている。

墓石は伊豆石で造られ、『ペリー艦隊乗員の墓地保存整備事業報告書（略）（平成 23 年（2011））』によると、墓石は、日米和親条約下田条約締結直後から建造されたことが、S・W ウィリアムスの『ペリー日本遠征随記（昭和 53 年（1978））』に記載されて



明治 41 年（1908）慰霊祭

いる。また、明治 27 年（1894）4 月、墓地と墓石の修繕が行われた経緯を記した石柱が残されている。なお、明治 41 年（1908）の慰霊祭の写真には、現在の墓石と同じものが残されている。

○ゼームス・ハミルトン（海軍医官）

嘉永 7 年（1854）9 月 6 日、航海中サスケハナ号にて死亡

○G・W・パリッシュ（水兵 21 歳）

嘉永 7 年（1854）5 月 5 日、旗艦ポーハタン号前橋より墜落死亡

○ロバート・ウィリアム（艦長給仕・21 歳）

嘉永 7 年（1854）3 月 6 日、神奈川にて死亡、5 月 10 日改葬

○ジョン・D・ストーム（海軍火夫）

安政 1 年（1855）2 月 2 日、ポーハタン号にて死亡

○アレキサンダー・ズーナン（水兵）

安政 4 年（1858）7 月 31 日、ミシシッピー号にて死亡

③下田公園 下田開国記念碑

ア 下田公園の歴史

下田公園は、城山公園とも呼ばれ、戦国時代末期、天正 16 年（1588）、後北条氏が秀吉方の水軍との対決に備えて下田城を構築した場所である。江戸時代は、幕府の直轄林（御林）として管理された。

イ 下田開国記念碑

下田公園の開国記念広場には、昭和 28 年（1953）に開港 100 年を記念して建てられた開国記念碑がある。この記念碑の前で黒船祭の記念式典が開催される。この記念碑にはペリーとハリスのレリーフ像と二人の言葉が刻まれている。



下田開国記念碑

『余は平和の使節として此の地に来たり』(ペリー)

(I have come here as a peace maker) (Perry)

『私の使節はあらゆる点で友好的なものであった』(ハリス)

(My mission was a friendly one in every respect) (Townsend Harris)

ペリーの言葉を選んだのは、戦後アメリカ連合軍最高司令官だったマッカーサー元帥。ハリスの言葉はウィリアム・J・シーボルト。『開国記念の碑』の文字を書いたのは、戦後の日米時代を切り開いた吉田茂総理。碑の設計と、ペリー、ハリスのレリーフの制作者は、日本美術展覧会審査員を務めた西伊豆町仁科の彫刻家、堤達男氏である。

④了仙寺周辺のまちなみ

了仙寺と繋がる通りは、ペリー提督が、上陸の際に、先頭に大砲を曳く 300 余人の水兵率い、軍楽隊の奏楽に合わせ、了仙寺まで行進した。この故事に倣い、通称「ペリーロード」と名付けられている。

ペリーロードは、かつては花街があり、平滑川^{ひらなめ}に沿って街路がある通り沿いには、安政元年（1854）に建てられたという「土佐屋」、大正 3 年（1914）に建てられという「草画房^{そうがぼう}」、休憩所として利用されている大正 4 年（1915）に建てられた「旧澤村邸」など、幕末から近代・現代の建物が混じり合い、調和した独特な景観を見ることができる。



ペリーロード



土佐屋（安政元年(1854)建築）



草画房（大正 3 年(1914)建築）

⑤玉泉寺周辺のまちなみ

玉泉寺のある柿崎地区は、須崎半島の付け根に位置し、下田港湾区域に面し、吉田松陰が金子重輔^{かね ことしげのすけ}とともに、密航を企てた弁天島などの史跡がある。柿崎の主要道路である県道須崎柿崎線は、須崎にある御用邸へのアクセス道路でもあり、沿道は低層の建物が多く、落ち着いた雰囲気を呈している。海岸沿いには「ハリスの小径」^{こみち}が整備され、憩いの空間が形成されている。



玉泉寺周辺のまちなみ

(4) 黒船祭

①歴史

『静岡県 の祭り・行事（平成 12 年（2000））』に、第 1 回黒船祭は、昭和 9 年（1934）に日米和親条約による下田港開港 80 周年を記念して開催されたと記載されている。

ここまでに至る経緯としては、大正 13 年（1924）に森一^{もりはじめ}を主宰として創刊された雑誌『黒船』がある。この雑誌は、下田や南伊豆に関する文学、歴史、教育、政治、経済といった幅広い問題が扱われ、この誌上で「唐人お吉」^{とうじん きち}が村松春水によって紹介された。これをきっかけに、お吉の物語の舞台として、下田の名が全国に知られ、観光客が訪れるようになった。



大正 14 年（1925） 上陸したバンクロフト大使

大正 14 年（1925）には、開港 70 周年記念として、バンクロフト駐日アメリカ大使（写真右側花を贈られている人）を迎え、歓迎会、花火大会、提灯行列が行われた。

昭和 8 年（1933）には、東京湾汽船東京—大島—下田航路と伊豆循環道路東海岸線伊東—下田間が開通し、京浜地区からの交通条件が改善された。観光地としての更なる発展が期待されつつも、当時下田町内には温泉が湧出しておらず、見学施設や宿泊施設が未整備であったため、観光地としての将来に危機感を抱く者もあった。

『黒船：第10巻第12号（昭和8年（1933））』に、黒船祭の原案が「日本国運の進展を祝福し併せて遊覧者の祖国日本の回顧に資せんとする」ことを目的として提示された。これをもとに、昭和9年（1934）に、下田町民によって第1回黒船祭が開催され、米国大使グルー夫妻を迎えての式典や多くの行事などが行われた。

下田八幡神社例大祭が、江戸時代の下田町民を活気づけるために生まれたものであるならば、黒船祭は、昭和時代の下田町民を活気づけるものとして生まれたものである。昭和9年（1934）以降、昭和16年（1941）から昭和21年（1946）の日米関係の悪化により開催を中止した以外は、半世紀を超えて開催されている。米海軍等とともに行う黒船祭は、様々な行事を通じて地域レベルでの日米交流を成す祭事として、地域に浸透している。

②現在の黒船祭

ア 核となる行事

現在の黒船祭は5月第3金曜日から日曜日までの3日間行われ、旧下田町内と下田港、玉泉寺を会場として、多くの方々が関わって、様々な行事が行われる。まず、黒船祭初日に、米海軍主催の「墓前祭」が玉泉寺で行われる。昭和29年（1954）から行われている。玉泉寺にある米軍艦隊（黒船）の乗組員5人の墓前で玉泉寺住職がお経を唱え、在日米海軍司令官らが献花して冥福を祈る。玉泉寺内では、米海軍音楽隊の演奏が披露される。

夜には、日米交流のきっかけとなった下田港全体を会場として花火大会が行われる。海上から打ち上げられる花火を見物するために下田港を取り囲むようにして多くの市民が集まる。鎮魂と日米交流を記念して、昭和9年（1934）の第1回から行われている。当時、5月開催の花火大会は珍しく、花火師が新作の花火を披露する場となっていた。



墓前祭 献花（玉泉寺）



米海軍音楽隊（玉泉寺）



海上花火大会（柿崎弁天島より）

また、「記念式典」は、黒船祭2日目の朝行われる。戦前は名称が異なっていたものの、第1回から固定した行事であり、昭和28年(1953)からは、開国記念碑のある下田公園の開国記念広場にて執り行われている。式典では、日米の代表者が座り、日米親善を誓い合い、その様子を多くの市民が見守る形式となっている。

そして、昭和42年(1967)から行われている「下田条約調印式再現」は、了仙寺住職らが中心となり、開国の史跡として指定されている了仙寺で、日米和親条約下田条約(付録13か条)が調印された出来事を再現している。これによりこの史実を来訪者や市民に伝えている。

そのほか、黒船祭の内容は、日米交流の祭事として、「日米の文化・技能を披露するもの」、「日米交流の場となるもの」の2つに分類される。

イ 日米の文化・技能を披露するもの

アメリカの文化・技能を披露するものとして、昭和29年(1954)から米軍音楽隊の演奏会が行われている。現在では、米海軍第7艦隊音楽隊演奏会が中学校や玉泉寺、旧下田町内と様々な場所で披露されている。

一方、日本の文化を披露するものとして、黒船音頭は昭和9年(1934)の第1回から行われていて、現在は下田市女性の会が主体となり開催している。黒船音頭には、安政4年(1857)にハリスに仕えたお吉のことが歌われている。



記念式典



下田条約調印式再現(了仙寺)



下田条約調印式再現
(昭和42年(1967))



米海軍第7艦隊音楽隊演奏会

「伊豆の下田 黒船音頭」

可愛いお吉のネ アリサヤ

可愛いお吉の涙もまじるヨ（ソイソイ）

波は四十五里 ナ ソリヤシヨ

相模灘 トサオサ ソヂヤナイカ

ハ ヨイヨイヨイヤサノサ ヤンレサ

そのほか、下田芸者による踊りの披露、着物のファッションショー、豆州白浜太鼓、朝日子供太鼓、開国よさこいの披露がある。

また、『黒船祭第50回記念誌（平成元年（1989））』によると、昭和40年（1965）には、海上自衛隊派遣艦の公開が行われた。海上自衛隊による艦艇披露はその後も行われている。

ウ 日米交流の場となるもの

日米交流の場となるものとして、第1回からパレードが行われている。パレードは、米軍、下田市民とで行われるもので、日米の文化・技能を披露した人々らがパレードに参列し、旧下田町内を約1時間かけて巡る。

また、昭和39年（1964）に、日米親善ソフトボール大会が行われていて、平成29年（2017）では、日米親善アームレスリング大会、日米親善ビーチバレー大会、日米親善綱引き大会を行い、地域レベルの日米交流の場となっている。

そのほか、黒船祭を楽しむ来訪者をもてなすため、旧下田町内の商店街が中心となって、商店街通りを歩行者天国にして、開国市という広場を提供している。



黒船音頭



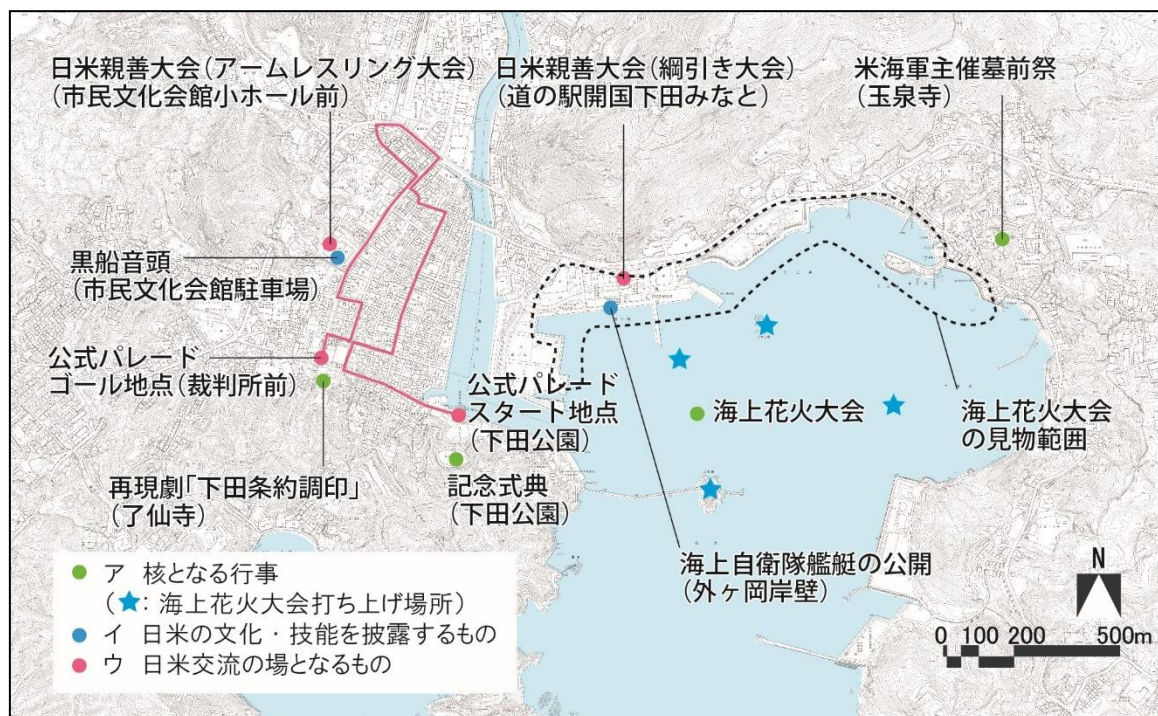
海上自衛隊掃海艇



公式パレード



サインを求める子ども（開国市）

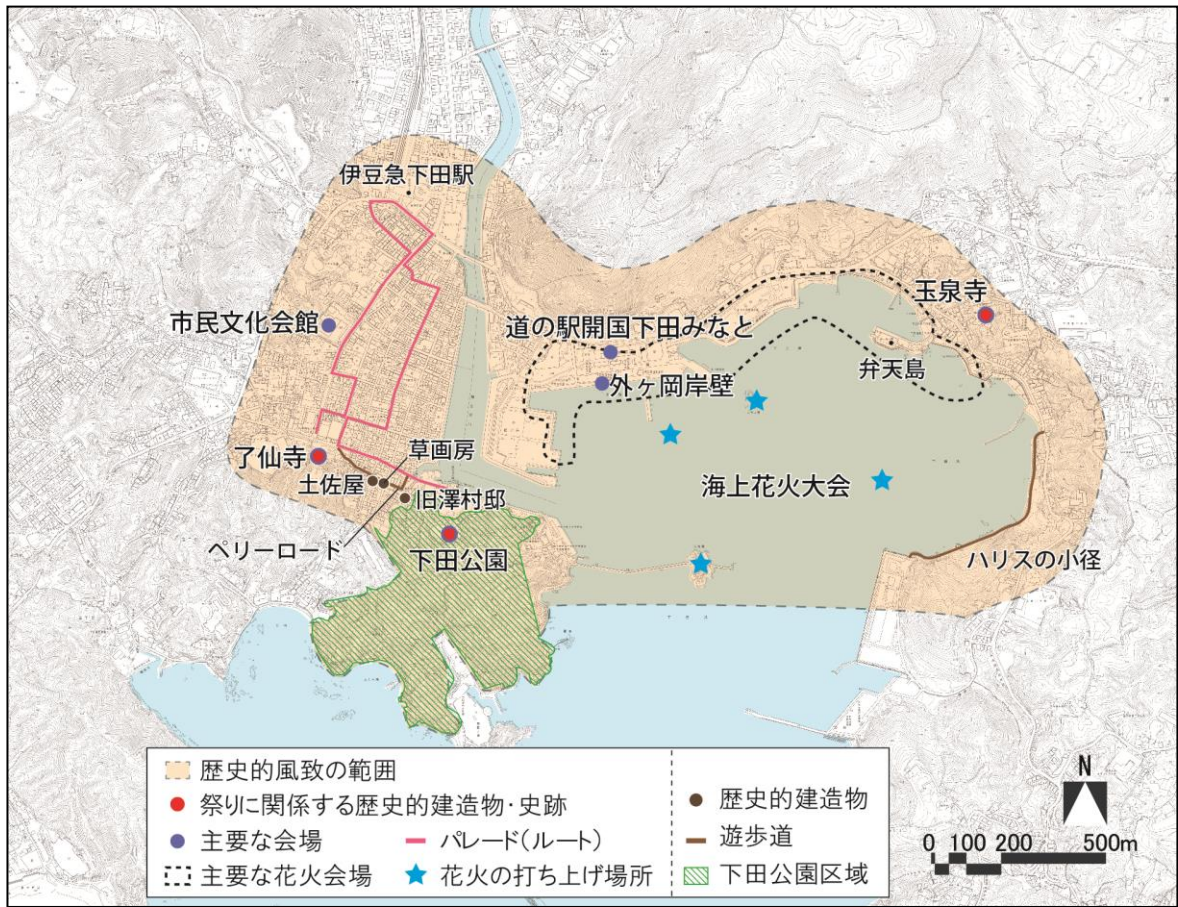


黒船祭の開催場所と催し

(5) まとめ

黒船祭は、昭和初期に地域を盛り上げるために始まった祭事である。現在では、日米の交流の祭事として市民に親しまれるとともに、多くの市民や市内の事業者が様々な形でこの黒船祭に関わり、黒船祭をきっかけとして下田開港の歴史を知ることができる、伝承の場ともなっている。昭和33年(1958)には、ペリー提督の出生地であるニューポート市と姉妹都市提携を結び、交流は、黒船祭の場以外でも広がっている。

黒船祭が行われる本地区は周囲を山々に囲まれ、下田港を中心として発展してきた。特に了仙寺周辺や玉泉寺周辺には、開国の歴史にまつわる史跡が点在し、江戸末期からの歴史的建造物も数多く残され、落ち着いたまちなみが形成されている。これら黒船祭と祭事が行われる下田港を中心とした了仙寺のある旧下田町地区や玉泉寺のある柿崎地区は、下田が大切にする開国の歴史とともに、維持向上すべき歴史的風致である。



黒船祭にみる歴史的風致の範囲